

---

# この体の七割は触手で出来ている

猫谷

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

この体の七割は触手で出来ている

### 【Nコード】

N8209P

### 【作者名】

猫谷

### 【あらすじ】

朝、目覚めたら化け物になっていた。喰って喰われて喰って喰われた。辿り着いたのは、山のように大きな体。体を支える幾多の触手。世界は荒廃し、人でない異形の怪物が人を喰らう。そして怪物に立ち向かう人々。姿は人に非ずとも、心は人でありたい。これはそんな物語。

## 第一話（前書き）

最初は主人公、ほとんど出ません。

文章下手です。

笑って許していただけると幸いに思います。

## 第一話

Side 第一部隊隊長・新型神機の担い手

それは月の綺麗な夜の事。空には孤独で儂く美しい満月と、それを彩る緑のオーロラ、そして満天の星空が見えた。灯りを用いずとも充分な月明かりに満たされた夜の事。

この日、ボクらの運命は変わったのだと、今はそう思う。

その日、第一部隊に所属するボク（轟カナデ）、橘サクヤ、藤木コウタ、アリサ・イリーニチナ・アミエーラの四人に任務が下った。ボクら第一部隊の主な任務はアラガミの強襲殲滅。

強力なアラガミが発見されれば襲い殺し喰らい、新種が発見されれば襲い殺し喰らう、積極的自衛を行動方針とする部隊だ。

簡単に言うならば『殺られる前に殺れ』、それがボくら第一部隊のお仕事戦いだった。

鎮魂の廃寺に出没するシユウの討伐。

それがボくらに課せられた任務だ。

結末を言うならば、任務自体は滞りなく達成し、誰一人欠ける事なく完了した。

第一部隊の全リーダー、兩宮リンドウから引き継いだ『死ぬな』の信念は今や全員の信念となっており、誰一人油断せず、生きる事に貪欲だった事がこの勝利に繋がったのだと、ボクは思う。

ボクは神機を捕食モードに変えて、アラガミ（シユウの死骸）を喰らう、構えを取る。

アラガミを討伐し、喰らい、素材を得て、アナグラへと帰島する。  
それがボくら      G o d   E a t e r      の日常だった。

「それ、ちよつと待った！」

けれど今回は違ったようだ。

通りの向こう側、階段が存在し、見えなかった死角から、二人の男性が出てくる。

一人はボくらと同じ第一部隊所属のソーマ。

第一印象は一匹狼、もしくは野良犬。

そんな感じだった。

もう一人の名はペイラー・サカキ。

ボクラの拠点であるフェンリル極東支部の、アラガミ技術開発統括責任者だ。

研究が三度の飯より好きという変人さんである。

「博士、何でこんなところに!?!」

コウタが、皆が思っているであろう疑問を口にする。

「説明は後だ」

説明してよ、博士。

「とにかく、そのアラガミはそのままにして、ちょっとこっちに来てくれるかな」

そう言って、博士はボクらに背を向けて、シユウから離れていく。ボクらの意見は関係ないようだ。

ボクは、仲間の意を確かめる為に、アリサに顔を向けた。

そして、ちょうどアリサも顔をボクに向けた。

好きな人とタイミングが合った。

そんな時、ボクは嬉しくなる。

そしてアイコンタクト。

互いの瞳に浮かんだのは諦観の色。

アリサもボクも、同じ事を思ってた。

『博士だから仕方ない』

それがボクらの出した結論だった。

アリサは肩を竦めると博士を追って歩き出す。

ボクもアリサに続いた。

博士は懐中時計を取り出して時間を確認している。

どうやら何時も飄々としている博士も、柄に無く緊張しているようだった。

これは何か、とてつもない事が起きるのかも知れない。  
例えば、十匹のヴァジュラに囲まれるとか。

あははは・・・笑い事じゃないね。

取りあえず何が起きてても良いように覚悟だけは決めておこう。

最悪、もう一戦するかもしれないんだから。

」  
「来るよ」

緊張が張り詰め重くなった場に博士の声が響いた。

シユウの死骸に何かが降り立った。

それは人型をしていた。

けれど、人間ではなかった。

その身は全体的に白く、肌は病的に白く、髪も新雪のように真っ白で、血に濡れた外套が不気味で、月明かりに照らされたその身は幻想的で、とてもとても美しい少女のような、何かがそこには居た。

その少女を警戒した私たちは、すぐにでも殲滅する事が出来るように半円になって囲み、神機を向ける。

神機は対アラガミ用の兵器ではあるけれど、人に使えば、ものの数秒で肉塊へと変えてしまう様な威力を持っている。

その神機が五つ。

これ以上は無いほどの威嚇行為だった。

けれど、少女は笑っていた。

全く、こちらを警戒していない。

その目はまるで初めて出会った同族に向けるかのような歓喜に溢れていた。



「オナカ・・・スイ・・・タ・・・ヨ？」

少女が喋り笑みを向ける。

第一声がそれかよ、とボクは突っ込みたい。

神機を向けられているのだから、怯えるなり、怒るなり、警戒するなり、そっちに反応して欲しかった。

でないと、次の行動が予測できず、やり難い。

「ひっひえー！」

コウタは怯えすぎ。

第一部隊の数少ない男なのだから、最どしつと構えてもらいたい。

そして、ソーマは頬を染めるな。

ボク以外は気づいてなかったからセーフだけど、ばれたら折角作り上げたキャラが無駄になるぞ。

てゆーか、さっさと一匹狼なんて止めてしまえば良いのに。

「いやー、ごくるうさま。やっと姿を見せてくれたね。ソーマもここまで連れて来てくれてありがとう。

君のおかげでここに居合わす事が出来たよ」

博士は喜色満面といった様子で上機嫌にお礼を口にする。

「礼などいい。どういふ事が説明してもらおうか」

「いや、彼女が中々姿を見せてくれないから、暫くこの辺り一帯の餌を根絶やしにしてみたのさ。どんな偏食家でも空腹には絶えられないだろう?」

うん、その通りだ。

空腹は辛い。

「ちっ、悪知恵だけは一流だな」

ソーマ、君は今良い事言った。

良いぞ、もつと言え。

「その通りだ!」

再度、何かがシユウに降り立った。

それは人型をしていた。

人の形を真似た異形の存在アラガミがそこには居た。

身長は二メートルに近く、夜空に溶け込むかのような漆黒の体。

ギザギザ（WWW こんな感じ）の口。

真紅に輝く二つの瞳。

頭部の左右に一本ずつ、二本の角。

上半身は裸で下半身には腰布が一つ。  
片手に身の丈以上の巨大さを誇る大剣を持った存在が、鬼のよう  
な生き物が其処に居た。

「お前の所為で、俺は空腹だ！」

そう言つと、それは武器を放り出し、空いた両手でシユウを引き  
裂き、喰いだす。

顔らしき所は顔だったようで、ギザギザの口を開き、喰いだす。  
喰う様は神機の捕食する様に似ていた。

「うめー。一週間振りの飯うめー」

「イタダキマス！」

ガツガツと二体はシユウを貪り喰う。  
すごい食べっぷりだった。

「ええつと、博士、あれは一体？」

コウタが博士に聞く。

ボクも是非とも答えて欲しい所だった。

特にあの黒い怪人は敵かどうか知りたい。

「そうだね。詳しいことはラボで話そう。君たちも付いて来てくれるね」

「イタダキマス！」

「飯が有るなら良いぞ」

アナグラに連れていくんですか博士。  
それは流石に…まずくないですか？

仲間とアイコンタクト。

皆の目が語る。

『博士だから仕方ない』

厄介なことにならなければ良いんだけど…きっと無理だろうな。

## 第一話（後書き）

次の更新はGod Eater Burstがクリア出来たらになると思います。

## 第二話

<Side:砲撃手な二重人格者>

イツエーイ!

今回は私、フェンリル極東支部の砲撃手こと通称”味方撃ちのカノン”がお送りします!

……ふふ、自分で言ってる悲しくなる通り名ですね。

本当は”華麗なる砲撃手カノン”とかそんなのが良かったんですけどね。

一体どこをどう間違ったら、こんな通り名が付けられるんでしょうか?

最近ではこの通り名の所為で、砲撃手なのに前衛をやらされる始末ですし、もう死んじゃおっかな。

「カノンちゃん」

おお、私の親友、心の友、ヒバリちゃんが私を呼んでいます。今、行きますよー。

「カノンちゃん、博士が研究室ラボに来るように、だって」

「え?」

今なんて申しましたか？

「ごめんね、ヒバリちゃん。私の耳、おかしくなっちゃたみたい。もう一度言ってくれるかな」

ヒバリちゃんが申し訳なさそうに顔を伏せます。

親友にこんな顔はさせたくないけど、私にとっての死活問題だから許して。

「えっとね…博士が研究室ラボに来るように、だって」

「何で？ クビ？」

私はクビではない、と否定して欲しくて、ヒバリちゃんに詰め寄ります。

「えっと…その…何と言うか……」ご愁傷様です」

ヒバリちゃんは涙目でそう告げた後、私に背を向けて駆け出しました。

「そんな！ 待ってよ！ …ヒバリちゃん！」

私の伸ばした手は空を切り、宙に漂う。  
きつと今、私の背中は哀愁に満ちている事だろうと思います。

さて、何時までも、こうして佇んでいても状況は変わりません。  
仕方ないから、博士の元へ行きましょう。  
どうかクビだけは避けられますように……。

「ハアハア……涙目のヒバリちゃん……可愛グハツ……いよ……」

途中、通路に蹲っていた赤い人を踏んづけたけど、問題はないよね。  
ね。

親友のストーカーなんて、どうなったって構わないし。

### 研究室へ移動中

研究室の扉を開きます。  
ここはフェンリル極東支部で最も恐れられている場所の一つ。  
私にはこの扉が魔窟への玄関に見えたものです。



「やあやあ、良く来てくれたね。カノン君」

室内へと入れれば中には榊博士が居ました。

人の事と呼んどいて、自分は居ないなんて事は滅多に無い事でしょうけど。

「さあさあ、そのソファーに座ると良いですよ」

ソファーに座る事を進められました。

相手は仮にも上官、進められて断れる訳がない。

長居するつもりは無いから、腰を下ろすのは避けたかったのにな。

「それで、一体どのような理由で私を呼び出したんですか？」

「ああ、そうだね。それじゃあ、本題に入ろう。まずはこれを受け取って欲しい」

そう言っって博士は私に書類が入っている封筒を手渡しました。

一体何でしょう？

「辞令だよ」

え？

ひょっとして…もしかして…もしかなくても…クビ？

いやいや、きつと聞き間違いだよ。

うんうん、きつと治冷って言ったんだよ。

きつと、冷え性の直し方とかが書かれた書類の事だよ。

そうに違いないよ。

さすがは私の頭脳、自分でも驚くほどの冴えっぷりだね。

それで決定。

まったくびつくりしたな！。

「はあ、治冷ですか？」

私は辞令<sup>クビ</sup>なんて絶対に認めませんからね！。

「そうなんだよね。まあ、読めば分かるんだろうけど、手っ取り早く説明させてもらうよ。君は第二部隊から僕直属の、試作型God Eaterの実験部隊に移ってもらうことになる」

え？

クビじゃないの？

「今、試作型God Eaterの実験部隊に移るって言いましたね？ 言いましたよね！？ やった！ クビじゃない！」

イヤッホー！！！！

やったよ、ヒバリちゃん。

私はまだGod Eaterを続けられるよ！

「それじゃ、OKで良いんだよね？」

「もちろんですよ！ クビじゃないなら全然OKです！」

「そっか助かったよ。よし、それじゃ君以外の部隊員を紹介しよう。虚君<sup>うつつ</sup>、入ってきてくれ」

博士がそう言うと、研究室の右奥の扉が開きました。

そこから現れたのは黒い怪人でした。

身長は二メートル程。

黒一色のボディスーツが頭部からつま先まで覆いつくし、その上に赤い幾何学模様の描かれた漆黒のロングコートを身に纏い、頭部には二本の角と、顔の上半分を覆いつくす黒のゴーグル、その双眸には紅い光が灯っている。

それは口じゃないだろってツッコミたくなるギザギザした口。

絶対人間じゃないであろう生き物が其処に居ました。

何処から如何見ても怪人と称せるような人が現れました。  
と言うか何処から如何見ても不審者です。

「これからお嬢ちゃんのパートナーになる。虚<sup>うつつ</sup>ヴォルスだ。よろしく頼む」

ヒバリちゃん…私、何か悪いことしたのかな？

### 第三話

あの日、俺の人生は、人としての生は終わった。

そして、第二の生が始まったのだ。

<Side：元人間、現アラガミ>

俺が空腹に耐えかね、人間とGod Eaterと接触した後、人型アラガミの俺と、人間型のアラガミの少女は研究室<sup>ラボ</sup>へと招かれた。

其処で博士は彼らGod Eaterに俺たちの<sup>アラガミ</sup>正体を告げた。

その時の彼らの心情は驚愕の一言で表せるだろう。

彼らはそれくらい驚いていた。

具体的に言うならば、両手を頭上に上げ、片足を膝を腰より高く上げるポーズだ。

きつと「ひょえ〜」と言う言葉が似合う事だろう。

ナイスな横乳を見せていたサクヤと言った女性は、俺たちがGod Eaterの本拠地たるアナグラに居る事に納得していなかったが、博士と二三言葉を交わすと渋々ながらも引き下がっていた。

どうやら彼女は博士に、知られては都合の悪い事を握られていたようだった。

とまあ、そのような事が有った。

その後、彼らは解散し、俺たちは博士が責任を持って預かるといふ結果に落ち着いた。

「それで…何を聞きたいんだ？」

俺は博士と二人会話していた。

もう一人の少女は、腹いっぱいアラガミを食べて満腹になったからか、幸せそうな顔で眠っている。

「君の事さ」

「俺に男と恋愛する趣味はないぞ。他を当たってくれ」

「そういう事じゃないんだけどね」

博士は困った顔をする。

「なに単なる冗談だ。許せ」

「許すから、君が発生した時の状況なんかを聞かせてくれないかな？」

「まあ、それくらいならお安い御用だ。少し長話しになるかも知れないが、それは勘弁してくれよ」

俺は博士に自身の事を話す事とした。

「…昔の話だ」

（以下回想）

気付くと俺は一人、廃棄され野晒しになっていたであろう工場の  
ような場所で佇んでいた。

此処は一体何処なのだろうか？

「痛っ」

周りを見渡そうと、動いたら転んだ。

何も無い所で躓くとは不様なものだ。

地面に片手を付き、バランスを取り、立ち上がるうとした。

出来なかった。

腕が…無かったから。

いつの間にか俺の両腕は無くなっていた。

仕方ないから、脚の力で立ち上がる。

腕が無くなっていた事を仕方ないで済ます自分はおかしいと思っ  
たが、無いことが自然な気がして、深く考える事はなかった。

周りを見渡すと…何だか目線がおかしい。

体がおかしい。

自然と取っていた姿勢もおかしい。

立ち上がらずに中腰で前傾姿勢を取っていた。

感覚的には両手を突かないクラウチングスタートが近いだろうか。

俺は一体どうしてしまったのだろう。

幸い水場がすぐ近くに有った。

水場が有るなら水面に自身を映す事で姿の確認が出来る。

俺は水場に向けて駆けた。

水面をのぞきこみ、自身の姿を映す。

そこに写っていたのは、二足の化け物だった。

頭部が発達し、巨大な牙と強靱な顎、食べることに特価した二足の恐竜。

そんな感じの生き物が水面に映っていた。

俺は気付いたら、化け物になっていた。

どうしてこうなったのかは、何も分からない。

けれど、一つだけ分かるとすれば、もはや退屈でただ生きているだけの緩やかな死に向かう生は終わりを告げ、大いなる自然の摂理、弱肉強食の世界へと足を踏み入れたという事。

あ…でも、もう終わりだ。

背後に大きなライオンが見える。

すでに、溜めが終わったのか、今にも飛び掛かってきそつだ。

てか、飛び掛かってきた。



これは…死んだな。

俺の瞳に、最期に映ったのは、強靱な牙が生え揃った口を大きく開き、俺を噛み殺そうとする化け物だった。

俺の自然界デビュー、ほんの三分。

もう少し…生きたかった。

### 第三話（後書き）

God Eater Burstクリアしてません。間違いが有ったから教えてくれると嬉しいです。

## 第四話

<Side: 四足の獣>

気付くと俺はまた一人、廃棄され野晒しになっていたのであろう工場のような場所で佇んでいた。

周囲を見渡す。

鉄で造られた森、すぐ近くに水場。

眼前には喰い散らかされた二足の恐竜モドキ。

二足の恐竜モドキとなっていた時と見える景色は変わらない。変わったのは、俺の体だけだった。

四本の足で歩き、水場を目指す。

どうやら今回は四足のようだ。

前回よりは歩きやすく、バランスが取りやすい。

これなら咄嗟の事にも反応できるだろう。

水面を覗く。

映ったのは四足の獣、ライオンのような生き物。

ライオンを巨大化し凶暴にし鬣たてがみをマントに創り返たかのような姿だ。

そして、自分を殺した生き物にそっくりだった。

何の因果かは分からないが、どうやら自分は、姿は変わったものの生きているらしい。

まだ生きていけるらしい。

素晴らしい事だ。

それでは、今度こそ自然界デビューを果たすでしょう。

俺はこの鉄塔の森を後にする。

まずは何処かに寝床を作らなくてはならない。

ならばせめて、コンクリートの上ではなく、大地の上に作りたかった。

（数日後）

俺は、かつて人が住んでいたであろう荒廃した街に辿り着いた。

そこは在りし日の面影は無く、無惨に喰い散らかされた建物を残し、塵と消えゆく街だった。

そこで『新宿』と書かれた看板を発見した。

ここは東京なのか、と思う。

どうか未来では有りませんように。

そう願った。

その街で、俺は始めて自分以外の、大型の生命体と出会う事になった。

これまで出会ったのは小型の生き物ばかり、この姿になる前の自<sub>足の恐竜</sub>分の姿にそっくりなやつや、彫刻みたいなやつ、空飛ぶ一つ目に女性の上半身を組み込んだかの様な生き物、その三種類だった。

大型の生命体は鳥と人間を融合させたかのような姿をしていた。  
鳥人と名づけてみる。

鳥人は俺の存在に気付き、足を止めた。  
無論、俺も足を止めた。

鳥人にとって俺は上質な獲物に過ぎず、俺にとっても鳥人は上質な獲物に過ぎない。

それを俺達は一目見て、互いに理解した。  
だから、互いの命を奪うために殺し合うのは、当然の事だった。

所詮、この世は弱肉強食。  
互いに奪い合い、殺し合い、戦い合う、それだけのこと。

「……………またか」

眼前に広がるのは喰い散らかされた四足の獣の死骸。

俺は又も復活していた。

前回、鳥人に喰われた、喰われた…筈だった。

それなのに、俺は今、鳥人の体で生きていた。  
この体は俺を殺した鳥人の体だろう。

体は傷だらけで、至るところに俺が付けた傷がある。  
その傷は殺し合いの激しさを突きつける。

すでに治り掛けているものの、その痕は未だ消えていない。

俺はまだ傷付き、治った経験が無いから断定はできないが、殺し合いから、さほど時間は経っていないと見える。

そう、俺は負けたのだ。

鳥人に負けた理由を挙げるなら、経験の差と相性、その二つだろう。

俺はほんの数日前にこの世界　　此処が未来なのか異世界なのかは分からない　　に来て、戦いらしい戦いなんてしたことがなかった。

今まで戦ったのは小型種ばかりで、自分と同じくらいの能力を持つものとの殺し合いは初めての事だった。

その点、鳥人は戦い慣れていたようで、経験に差があった。

そして、相性の問題もあった。

俺が使っていた四足の獣の体は電気を扱うことができた。

雷球を発生させ撃ち出したり、自身を中心に電撃をドーム状に発生させることもできた。

中々役に立つ固有の力だった。

そして、鳥人は熱を扱うことができた。

掌てのひらから熱を放出し、近距離、遠距離、防御と使い分けていた。

この熱を用いた攻撃を受けた時、他の攻撃に比べダメージが大きかった。

このライオンの体表はとても硬く、多少の攻撃ではびくともしなかったが、鳥人の熱を用いた攻撃の前には、脆かった。

鳥人が掌を地に付け、そこから放出された熱の壁に体の一部が触

れた時、それは起きた。

結合崩壊とでも言えば良いのか、鎧であり外殻であった体表の部分が崩れ去り、内側が剥き出しになった。

鳥人もそれに気づいた様で、それからは俺から付かず離れずの距離を保ち、隙を付いて熱の弾を掌から放出し俺を確実に殺す、という戦法に切り替えた。

そうして、俺は負けた。

## 第四話（後書き）

感想がともうれしいです。ありがとうございます。



## 第五話

気づくと俺はまた一人、荒れ果てた街に佇んでいた。  
眼前には四足の獣の死骸。

俺は俺を殺した生命体の体を奪っていた。

俺は一体何なのだろうか。

思えば、この世界は何なのだろうか？

未来なのだろうか？

だとしたら、人類は滅んでしまったのだろうか？

この体は、この生命体は一体何なのだろうか？

自然に生まれるような生命なのだろうか？

人は絶滅したのだろうか？

異世界なのだろうか？

分からない事だらけだ。

…まあ、どうでも良いか。

今、俺は生きている。

『我思う、故に我有り』

たとえ、此処が何処であろうと、自身の体が変わろうと、すでに人間で無かろうと、『俺』という意味が其処に存在するのなら、俺個人の世界は変わらない。

取りあえず、この体の性能を調べる事から始めよう。

あいつは、鳥人は手のひらから熱を放出し攻撃や防御に利用していた。

俺が使っても出来るのだろうか。

試してみる。

ちよつと違つたけれど出来た。

熱を放出する事は出来ず、代わりに電気を放出する事が出来た。  
また、体に電気を纏うことも可能となっており、俺が戦ったあいつよりも出来る事は多いようだった。

そして、これは四足の獣だった事が影響しているのだろうか。  
体から電気をドーム状に放出することや、四足の獣の時に出来たことは、この体になっても、変わらずに使えるようだった。

何故なのだろうか。

まあ、いずれ分かる事だろう、今考えても仕方ない。

今、考えるべきは今後の方針だろう。

取りあえず、やる事は無いし、世界を見て回ろうか。  
それと、人間を探そう。

この姿では恐れられ、最悪攻撃されるのだろうけど、人が滅んだのか滅んでいないのかには興味がある。世界がどうしてこうなった

のか、とか聞きたい事もある。  
そして、人はこの程度で絶滅するような脆弱な種では無いことを  
確認したかった。

〔数週間後〕

俺はとある平原に来ていた。

此处は、一日のほとんどの時間、竜巻が暴れ続けている平原だっ  
た。

この平原に来た目的は唯一つ、本日の食料を手に入れる為だった。  
たとえ世界が変わろうと姿が変わろうと腹は減るもので、食事は  
生きる為に必要不可欠な要素だった。

俺がこの数週間、喰ったものと言えば、まるで巨大な鱈のような  
生命体、猿のような生命体、ライオンのような生命体、蠍のような  
生命体の四種に、小型の生命体三種だった。

小型の三種は弱く簡単に殺す事が出来たが、喰ってもすぐに腹が  
減ってしまい、何度も喰わなくてはならない面倒な獲物だった。

鱈や猿、ライオン、蠍は一匹狩ればその日は空腹を感じることに無くなる、上質な獲物だった。その上、この体は喰った命を取り込む事が出来るようで、今ではもう以前の姿とは変わっていた。

見た目が凶悪になった。

爪や羽は鋭くなり、体は鎧を纏っているかのように、銀色の体表に覆われている。

全体的に騎士っぽくなった感じだ。

どうやら蠍を喰い過ぎたみたいだ。

あれは美味かったからな、仕方ない。

どうやら喰らう獲物は強ければ強いほど良いらしく、強い生命を喰えば喰うほどにこの体は強くなっていくようだった。

日に日に強くなっている事が分かる。

この数週間で気づいた事がある。

喰えば喰うほど、それは聞こえたきた。

何時から聞こえていたのかは定かではないが、何時からか聞こえていた。

日に日に強くなっていく、体の裡から響く声。

戻りたい、戻りたい。

帰りたい、帰りたい。

取り戻せ、取り戻せ。 私の、俺の、僕の、自分の、の体。

体の裡から声が聞こえていた。

気にしない様にして耳を澄まし、獲物を捜す。

瞬間、平原に、風の音を引き裂く爆発音が響き渡った。

<Side：第一部隊隊長・轟力ナデ>

特務：か。

たった一人で遂行しなくちゃならない極秘命令。

リンドウさんもやっていたのかな…。

私は今日、支部長から特務を言いつけられ、この嘆きの平原へ一人で来ていた。

標的はウロヴォロス。

山のように巨大な体躯と、無数の触手と眼を持つ異形の超弩級アラガミ……らしい。

確証が無いのは、全て人づてに聞いた話で、自分の目で見たわけではないからだ。

実際に眼で見えてない以上、確証は持てない。

その情報を鵜呑みにして、判断するのは危険だと思っから。

今の極東支部にはウロヴォロスと戦った者は居ても、討伐できた者はいない。

ウロヴォロスの戦闘方法の全てを知る者は居ないのだ。

やはり、リンドウさんが逝ってしまったのが悔やまれる。

あの人には教わりたい事がまだまだ有った。

ウロヴォロスらしき影を発見した。

それは本当に巨大なアラガミだった。

山のように巨大なアラガミだとは聞いていたけれど、それは比喻でも何でもなく本当に山のように巨大なアラガミだった。

もし此処に雨宮リンドウなどのウロヴォルスとの交戦経験があるものが居たならば、その異常さに気づけたことだろう。

そのアラガミ、ウロヴォルスは異常なまでに巨大だった。

実に、通常のウロヴォロスの二倍の大きさをしていた。

通常のウロヴォロスを知る者ならば、これは新種か異常種かと疑

問に思い、討伐を諦め、アナグラに撤退し対策を取っていたことだろう。

けれど、此処にそんな者はいない。

此処に居るのはGod Eaterとなつて一年に満たない、ベテランと呼ばれるには未だ日の浅い一人の少女だった。

彼女にウロヴォルスとの交戦経験はない。

初めての邂逅だった。

だから気づけない。

彼女にとつてのウロヴォルスとは今眼前に存在するアラガミの事なのだから。

本当に、山と間違えるような巨大さだった。

その巨体は触手を束ねて作られたであろう四本の足に支えられて動いていた。体の四方には触手を束ねて作られた四本の腕が蠢いている。

無数の赤い眼が寄り集まって作られたかのような顔らしき部分は縦に細長く、左右に二本ずつ計四本の角を生えている。

大きすぎない？

リンドウさん…マジで一人で倒したんですか？

彼女が疑問に思うのも仕方無い事だろう。

そう思ってしまうほどに、このアラガミは巨大ウロヴォルスだったのだから。

最初の一撃で気づかれる前に捕食し、その後は相手の攻撃を避けながら隙を見てガンフォームとソードフォームを臨機応変に使い分け、時間を掛けてでも冷静に確実に仕留める。

それが私の戦術。

特別な事はなにもしない。

基本的に忠実で、最も難しいと教えられた戦い方。

これだけの事を出来るようになるまで、随分と時間が掛かった。

最初はアラガミに対する恐怖で、体が固まった。

リンドウさんのサポートが無ければ死んでいただろう。

新人の二割はこうして死んでいくらしい。

恐怖心乗り越えれば、早くアラガミを倒したい一心で冷静さを欠いた。

冷静さを欠けば、突出しすぎてチーム全体を危険に晒すことになる。

あの頃の私はそんな事も分かっていなかった。



付近に他の敵影は存在せず、こちらの存在には気づかれていない。  
チャンスだった。

私は息を殺し、見つからぬように密かに速やかに静かに近づき、  
攻勢を掛ける。

ボクは神機を構える。

この手に持つは神狩りの刃。

神を滅する為に造られし神殺しの刃。

人の造りし、最高の兵器。

私が今回扱う神機は、機動性に長ける軽量のショートソード。

動きの鈍重なウロヴオロスを相手取るならば、有利に戦える代物  
だった。

私は神機を捕食フォームへと切り替え、喰らう。

剣がその刀身をずぶずぶとコアに沈めると同時に、神機から黒い  
何かが滲み出す。

刀身の七割が沈んだ頃、それは姿を現した。

それは黒い口だった。

上顎と下顎に分かれ、そのどちらにも鋭い牙が並んでいる。

口腔は血のように、紅く染まっていた。

これこそが人が造りし、神殺しの刃。

尋常なる方法では滅せぬアラガミを殺す為の刃。

それが大きく開き、アラガミのオラクル細胞を喰らった。

バーストモード。

取り込んだオラクル細胞に反応して、神機が活性化する。

私は神機をソードフォーム、ショートソードへと切り替えると、ウロヴオロスに切りかかる。

一閃、二閃、三閃、四閃、五閃と時を経るごとに剣を振るごとに、傷が増えていく。

その巨体にとっては微々たるもので致命傷には早々ならないが、決して無視できる様なものではなかった。

ウロヴオロスが触手を振るって、私を薙ぎ振るわんとする。

私は地に伏せる。

体勢を低く、低く、胸を地に押し付ける用にして伏せる。

触手は私の頭上を通り過ぎる。

通り過ぎた触手はその勢いのまま、宙に振り上げられて、私を押し潰そうと振ってくる。

まるで空が落ちてくるかのような威圧感だった。

避け切れないと判断した私はその場を瞬時に離れ、触手の落下地点から距離をとる。

その間に神機はガンフォームへと姿を変えておく。

触手は地に叩きつけられた。

その威力は人体をミンチへと容易に変える事を可能とするほどのものだった。

もし私があの場合に居たならば、今頃生きてはいない、そう思わせて余りある威力だった。

アラガミの攻撃はそのほぼ全てが即死級。

まともに受ければ死んでしまうし、死ななくても骨が折れたりしてしまい追い詰められる事になる。

仲間の助けを得られない今の状況では、一撃たりとも受けてはいけない攻撃だった。

神機からパレットが撃ち出される。

神機からウロヴオロスに一発の弾丸が撃ち出され、着弾すると何発もの爆発を連鎖的に引き起こした。

瞬間、平原に、風の音を引き裂く爆発音が響き渡った。

「G u u u u o o o o o」

ウロヴオロスが苦悶の声を上げ、体勢を崩し、地に横たわる。

流石に全OPを用いた対ウロヴオロス用に造った特殊パレットは  
思いの他、良く効いたようだった。

これを造ってくれたアリサに感謝。

さすがはボクの嫁と、褒めてみる…残念な事に片思いだけ。

「G u u l u u u o o o o o」

触手が解<sup>ほど</sup>けていく。

絡み合った触手が解けていくと、ずるり、と上半分が地面に落ち  
た。

一体何をしているのか疑問に思う。

それは地面に落ちると、触手が蠢いて形を作り、動き出した。

二つに分かれたウロヴオロスが起き上がる。

そこには、二体のウロヴオロスが居た。

「マジで？」

私…生き残れるかな？

## 第五話（後書き）

感想ありがとうございます。前回の感想、返せなくてすみません。今回からは返す予定なので、もらえるかと狂喜乱舞します。

## 第六話（前書き）

第一話から第五話（第三話を除く）、少しでも文を付け足したり、変えたりしました。気が向いたら読んでください。

## 第六話

<Side：まだ名のない彼>

平原に爆発音が響いた。

それに続いて何かの苦悶の音が響き渡る。

あれは人なのだろうか？

視線の先では、一人の少女が二体の化け物と戦っていた。

少女は一メートルと五十センチ程の剣を軽々と振るい、時に銃、時に盾と使い分け、戦っていた。

どうやら俺の知らぬ間に人類はとても強くなっていったようだ。

あんな少女が、大の大人ですら振り回すのには苦勞するであろう剣を軽々と振り回す。

時代の流れを感じた。

何時の間にか人間は超人にでも、成ってしまったようだ。

きっと彼女みたいな人類だらけなら、サッカーや野球なんかのスポーツは演出過剰な漫画のような光景が繰り広げられる事だろう。

化け物はまるで触手がより集まって構成されたかのような姿をしていた。

触手の塊に二つの角の付いたお面を付けた様な外見だ。

化け物は二体で連携し触手を振るい、時にはビームを放ち、逃が



さない様に戦っていた。

触手を束ねて作った腕で彼女を叩き潰そうとしたり、横薙ぎに薙ぎ払おうとしていたりする。

彼女が手の届かない所に行けば、一体が顔からビームを放ち彼女の足を止め、もう一体が彼女に追いつき触手を振るう。

その所為で彼女は逃げる事叶わずに応戦するしかない様だった。

しかし、少女も負けていない。

化け物の攻撃を時に避け、時に防ぎ、隙有らばその手に持つ武器：剣／銃／盾を使い分け応戦していた。

最初の内は、一見少女が勝っている様に見えた。

化け物はその巨体故に動きは鈍く、素早く動き続ける彼女に翻弄されるばかりだった。

けれど、時が経つにつれて少女は徐々に追い詰められていった。

少女の動きが徐々に鈍くなってきたのだ。

それは当然の事なのだろう。

幾ら俺の知る人間にしては、人外な動きを見せても人は人。体力には限界が有った。

ならば、スタミナが切れないはずがなかった。

俺は彼女を助ける事にした。

今のままでは彼女が負けるのは、分かりきったことだったからだ。

まあ、彼女に何らかの隠された力が有って、追い詰められたら目覚めるとかでも無い限り敗北は必至だろう。

俺の体は化け物だけど、心まで化け物になってしまった覚えは無い。

俺が人で有るために助けさせてもらおうじゃないか。

俺は高台から滑空し、化け物の頭部に両の掌から発生させた二つの雷球を投げつける。

シユウ種は掌からエネルギー（熱）や電気、炎などを球体の形で発生させる事ができる。又、掌だけでなく腕部に纏ったりする事も出来る。本来シユウ種が掌から発生させられるのは、片手では掌に収まる程度、両手では体の三分の一程の大きさの球体だったけれど、彼の強化された力は片手で体の三分の一を覆い尽くす程の大きさを持った球体を発生させる事を可能とした。

掌から発生した電気が集まり、球体の形を取る。

それはバリバリバチバチと唸りを上げて、出番はまだかと催促しているかのように思えた。

俺は崖の上から身を投げる。

眼下に見えるは二体の化け物と少女。

少女を助けるために、俺は飛ぶ。

「トウッ！」

正確には飛行ではなく滑空。

高い位置から低い位置へ、風を切って舞い降りる。

途中、化け物には雷球を頭部に向かって投げつける。

雷球は唸りを上げて、化け物の頭部へ向かう。

命中。そして炸裂音。

一撃で葬ることはできなかったが、死角からの意表を突いた攻撃は化け物の体勢を崩し、スタン 体に高圧の電気が巡ることで、一時的な行動不能状態 に追い込んだ。

化け物は体の支えで有った、束ねて前足代わりにしていた触手に

力が入らなくなり、地響きと共に地に倒れ伏した。

そして俺は彼女の前に降り立つ。

「助けてやろうか？」

その時の彼女の顔は、彼女の名誉の為にも、鳩が豆鉄砲をくらったようなものだった、とだけ言っておこう。

## 第七話

「助けてやるつか？」

突然、空から現れたアラガミはそんな事を言ってきた。

正直、混乱してる。

アラガミが喋ったことにビックリして、見たことのないアラガミに驚愕。

なんで助ける？

こいつは何？

いやいや、今はそんなことはどうでもいい。

それよりも、さっきの発言の意味は？

彼は「助けてやるつか？」と聞いてきた。

誰を？

決まってる。

ボクをだ。

人を喰うアラガミが何でボクを助ける？

ボクを喰らう為？

それは違う。

それならわざわざ姿を見せる必要はない。

ボクが負けてから横取りするなり、勝ってから傷ついたボクを相手にすればいい。

じゃあ、その真意は何処にある？

「なんでボクを助けるのさ？ 君はアラガミだろ。敵じゃないのか？」

「カツカツカ。俺はこんな姿が、心まで化け物になったつもりはないんでね。同族の危機を見かけたら助けたくするのが人情ってものだろう」

こいつは人間？

「それとも此処で死にたいのか？」

「冗談！ボクはこんなところで死ぬ気なんて更々ないね！」

だってボクはまだやりたいことが山程有るんだ。

まだアリサに告白すらしてないし、アリサと×××だってしてない。

こんな所で死ねる訳が無いだろう！

「君はアッチのウロヴォロスをお願い。コッチのは、ボクが殺るか  
ら…さ！」

ボクは駆け出す。

ウロヴォロスが立ち上がるまで後少し、今なら有利に戦える。

と、言い忘れたことが有った。

足を止めず、振り返りながら言う。

「足止めしてくれれば充分だからね！ 無理はしないでよ！」

声が届くように少し張り上げて喋る。

そう伝えると彼はムツと顔をしかめた。

「ふん、何を言つかと思えば。∴別に倒してしまってもかまわんの  
だろう?。」

ボクはその予想外な返答を聞いてキョトンとする。

きっと間抜けな顔をしてることだろう。

「アハハハ。よろしく!。」

実に愉快的な気分だった。



## 第七話（後書き）

運命の弓の人の台詞って、これで良いんですけどっけ？

## 第八話

戦いは実に呆気なく終わった。

二対一から一対一と一対一に移れば、負ける理由はなく、ボクも彼も多少の傷を負うだけで勝利した。

そして、今コアを抜き取り特務が完了した。

終わったー。

死体に背を向け、彼の方へ歩き出す。

彼には聞きたい事が有ったから。

「避ける！」

彼が慌ててこちらに駆けてくる。

その目にはボクではなく、何か大きな塊が映っていた。

確認する為、体の反転に先して首を捻じり後ろを確認する。

視界に入ったのは、今にも振り下ろされ、ボクを貫こうとする触

手。

それは引き絞られた弓のようで、後は手を離せば良いという状態だった。

数本の触手が螺旋を巻いて出来ていてドリルの様な形をしていた。

体は咄嗟の事態に反応できず、ただそれを見ている事しか出来なかった。

どうしようもなく、それはボクに死を予感させた。

頭の中を思い出が、これまでの人生が駆け巡る。

アリサと始めて出会ったとき、アリサと初めて言葉を交わした時、アリサとした特訓、アリサの笑顔、アリサを好きになった事、色々な事が頭の中を駆け巡る。

これが走馬灯なのだな、と思った。

もう触手は目前に迫っている。

ボクは死を覚悟した。

ト  
ン  
ッ

頭を貫かれる寸前、背中を押された。

固まった体が前方に押し出される。

触手はボクの頭一つ分の場所を、通過していった。  
視界の端に千切れた髪が映る。

危機一髪、何とか助かった。

礼を言おうと、振り向けば見えたのは胸を触手に貫かれた彼の姿  
だった。

彼の姿は全身が伸びきっていて手を前方に、ボクを押しした状態で  
固まっていた。

グフッ

彼の口から血が吐き出される。

触手は動き出し、彼の体を本体の元へ連れて行く。  
彼は触手の中へ消えていった。

ウロヴオロスの体から、彼を咀嚼する音が響く。

風の音に遮られてほとんど聞こえない筈なのに、やけに大きく聞  
こえた。

バキバキボリボリグチャグチャバキバキボリボリグチャグチャバ  
キバキボリボリグチャグチャと咀嚼する音が響く。

瞬間、身が焦げるかのような憤怒で目の前が真っ暗になった。

気づくと私はウロヴオロスにグチャグチャにしていた。  
辺り一面に血と触手がぶち撒かれていた。

ボク自身も返り血で真っ赤に染まり、辺り一面が血で真っ赤に染まっていた。

ボクはウロヴオロスの残骸から彼の亡骸を引っ張りだした。

「南無…」

ボクは合掌し、彼の冥福を祈る。

そこに有ったのは、人とアラガミ、敵対し殺しあい憎みあう関係ではなく、自分の命を捨ててまで助けてくれた相手に対するお礼の

気持ちだった。

ボクにはアナグラに帰島するまでに、迎えが来るまでにやらなきゃならない事が有る。

自分を救って、命を落としたアラガミ、彼の始末をどうするかだ。

このまま平原に放っておけば、他のアラガミにその亡骸を荒らされる事だろう。

かと言って、迎えを悠長に待っていればアナグラの研究者に研究対象として、差し出すだけの事になるだろう。

彼の姿は今まで一度も見たことの無い新種だ。

研究者は喜び勇んで彼の亡骸を解剖する事だろう。

人類の事を考えるなら、彼を解剖し、調べるのが正しいことなのだろう。

けれど、カナデには出来そうになかった。

例えアラガミで有ろうと彼は命の恩人なのだ。

彼は彼女を救った者で、彼女は彼に救われた者。

救われた者が救った者を汚すなど、悲しいではないか。

酷いではないか。

人には追い詰められたからといって、やっていい事とやってはいけない事が有る。

その一線を越える事、それだけは駄目だとカナデは思い続けて、今も思っている。

だから、それはカナデにとって許せる事ではなかった。

かと言って、捕食するのは気が引ける。  
どうしようかな？

その一、爆葬。

亡骸を吹っ飛ばして誰にも汚されないようにする。

その二、ボクが捕食。

他のアラガミに喰わせるよりはずっとマシ。

決定『爆葬』

チュドーン

平原に爆発音が高らかに鳴り響いた。

## 第九話 Bルート

カナデがあの時、主人公を喰っていたら、というお話です。

「南無……」

カナデは合掌し、彼の冥福を祈った。

そこに有ったのは、人とアラガミ、敵対し殺しあい憎みあう関係などではなく、自分の命を捨ててまで助けてくれた相手に対するお礼の気持ちだった。

カナデにはアナグラに帰島するまでに、迎えが来るまでにやらなければならぬ事が有った。

カナデを救って、命を落としたアラガミ、彼の亡骸をどうするのだ。

このまま平原に放っておけば、他のアラガミにその亡骸を荒らされる事になるだろう。

かと言って、迎えを悠長に待っていれば、迎えに来た職員に発見



され支部に連絡が行くかもしれない。

アナグラの研究者に研究対象として、差し出す事になるのだ。

どうするか？

「それでは、いただきます」

結局カナデは彼の亡骸を捕食する事に決めた。

アラガミに喰わせるくらいならボクが喰う。

解剖され、標本にされるくらいなら、ここで弔い代わりに捕食する。

神機は生きている。

なら、捕食したモノもまた神機の中で生き続けるのだろう。

自分勝手な想いだ、とは思ったものの、そうする事が、一番良いかなと判断し、実行に移したのだった。

そして、その想いは彼女の予想を越えて本当となるのだった。

神機がその姿を変える。

新型の神機は四つの姿を使い分ける事が可能になっている。

近距離戦用の剣形態、遠距離戦用の銃形態、防御用の盾形態、そしてアラガミを喰らう捕食形態。

剣がその刀身をずぶずぶとコアに沈めると同時に、神機から黒い

何かが滲み出す。

刀身の半分が沈んだ頃、それは姿を現した。

それは黒い口だった。

上顎と下顎に分かれ、そのどちらにも鋭い牙が並んでいる。

口腔は紅く血のように染まっていた。

まるで、狼の口を首まで裂いて、皮を剥ぎ墨で黒く染めたような代物だった。

これこそが人が造りし、神殺しの刃。

尋常なる方法では滅せぬアラガミを殺す為の刃。

人の生み出した最期の希望、神機であった。

口が大きく開き、以前の姿とは似ても似つかない姿と成った彼の亡骸を喰らった。

此処は何処だ？

暗い。

俺は再度死に、再度蘇ったようだった。

これで何回目だろうか？

最期に覚えている光景は、化け物に殺されそうになった人間を庇い、槍と化した触手に胸を貫かれた光景。

最期に覚えているのは、生きながらに、咀嚼され、噛み千切られ、磨り潰された感触。

俺は、喰われたようだ。

あの人間はどうなったのだろうか？  
どうか生きていて欲しいと思う。  
せつかく助けたのだから。

ガシャン

何かのロックが外れた音がした。

ウィーン

体が持ち上がる。

俺は拘束されているようで、指一本動かせなかった。

指の一本さえも動かす事は出来ない。

それどころか感覚さえもない。

まるで指も腕も足もなくなってしまったかのような感覚だった。

上方から光が差しこむ。

眩しい、とは感じない。

すでにそう感じることもなかった。

ガシャン

動きが止まる。

どうやら外に出たようだ。

俺の視界に映ったのは、多くの武器が並べられた保管庫のような場所だった。

あの人間が使っていたような兵器が続々と、収納されていた箇所から吐き出される。

その種類は豊富で、一つとして同じ物は存在していなかった。

「さーて、今日は楽しい楽しい整備の時間っだよー」

声が聞こえた。

正に喜色満面といった女性の声だった。

声を聞くだけで、その声を発した者の感情が伝わってくるそんな声だった。

「そんな！？ エリザベスに傷が付いてるー！？」

武器を端から端まで軽く何かを確認するかのように見ていた彼女が足を止め、叫び声を上げた。

何か信じられない事でも起きたのか、その声は驚愕の色が大体を占めていた。

「コウタのやるー！ またやりやがったな！」

彼女は憤懣やるかないといった有様で、地団駄を踏んでいる。靴に鉄板でも仕込んでいるのだろうか、鉄製の床が凹んでいた。

「スパナでぶん殴ってやる！」

ちなみにエリザベスというのは武器の事らしい。

彼女は俺の横に据えられていた兵器に語りかけている。

「ううう、コウタはひどいやつだ。痛かっただろう…エリザベス。

今日は付きっ切りで修理してあげるからね」

今度は落ち込んだ。

エリザベスの傷の付いた箇所を撫で擦っている。  
ずいぶんと落ち着きのない人間だった。

「おい、人間」

俺は声を掛ける。

俺がどんな姿になっているのか確認したかったから、此処が何処  
だか知りたかったからだ。

彼女はきよろきよろと周りを見渡して誰か居るのかな、と探して  
いる。

「どこを見てる。こつちだ。お前の目の前だ」

そう言うと、彼女は俺に視線を向ける。

「え？ えー!？」

「何を驚く？」

どうやらこの人間、俺みたい な化け物が人語を解するとは、思っ  
てもみなかつたらしい。

俺みたいな化け物は喋らないとでも思っていたのだろうか。  
それは偏見というものだろう。

それとも拘束していれば、何もせずにおとなしくしているでも思っただのか。

だとしたら、その考えは甘過ぎるというものだろう。

「神機が喋った！ やった！ 遂に私の愛が届いたんだ！ ありがとう！ 神様：はいいや、仏様、神様！ 今日是一段とカッコいいよ。素敵だよ！ 私は楠リツカ。マクスウェル！ 結婚してくださいー！」

彼女は言葉を発する。

興奮しているようで瞳は輝き、口を挟む間も与えてくれない。

そしてこの言葉、どうやら俺に言っているみたいだった。

一部聞き間違いかと思われる言葉が有ったが、追求せずに聞かなかった事にしよう。

うん、きっとそれが一番良い。

マクスウェルとは俺の呼び名らしい。

前回の体が<シユウ>と呼ばれたように、識別用の名前が付けられているようだ。

それにしても、神機とはあの人間が持っていた兵器の事ではないのだろうか。

俺は…遂に無機物になってしまったのだろうか。

最初は人間、次は化け物、そして兵器。  
随分と数奇な人生？を送っているものだ。

最終的に何になるのか、不安だ。

様々な問答の後の事、彼は説得を諦め、現状を受け入れ、流された。

「リック君。それがかい？」

博士の前には神機に抱きつき、頬ずりしているリックの姿が有った。

何故、適合者でもないのに、神機に触れられるのかは分からない。  
きつと愛の成せる業なのだろう。

「はい。私の旦那様です」

「そうか。おめでとう。夢が叶ったんだね」

「はい！昔からの夢が叶ったんです！」

リックの夢。



昔からの夢。

それは『お嫁さん』である。

リツカは夢見る乙女なのだ。

…相手が神機でなければの話だが。

リツカも昔は普通の少女だった。

神機を目にして、心奪われた。

一目惚れだった。

それからリツカの生活は変わった。

毎日のように神機の保管庫に赴き、眺め、妄想する日々。

より近づけるように、勉強の日々。

神機に意思を宿すための研究の日々。

神機の事を考えなかった時はなかった。

「それじゃあ改造の時間だよ」

「ええ。頼みますね、博士。人間型に変形出来るようにしてください」

「ふふ。まかせたまえ。さあ、逝こうか」

台車に乗せられて、神機となった彼は運ばれる。

行き先は研究室。

ペイラー・榊の城。

そこで彼は改造されるのだ。

彼は台座に磔にされる。

周囲には様々な工具が並べられている。

ドリルやチェンソー、桐に螺子にドライバー、その他諸々。

ドリルが唸りを上げる。

ギューンギューンギューン

「やめろ！ ショツカアアアアアアアアアアア！！！」

アナグラにマクスウェルの悲鳴が響き渡る。

悲鳴を耳にして、一機の神機がその刀身を震わせている。

コアは点滅し、エマーゼンシーエマーゼンシーエマーゼンシーデーデーと助けを訴えているかのようだ。

絶対に表に出ないようにしよう。

その想いは性別不明の、とある神機の化身に刻み込まれたのであった。

人間怖い。人間怖い。リンドウ…何でボクを置いて逝っちゃ

たのさ。

彼もしくは彼女は引きこもった。

自発的に姿を表す事はきつと無いだろう。

第九話 Bルート（後書き）

続かない。

## 第九話

ウロヴオロスにコアを護る為の外殻で有る体を、咀嚼され噛み千切られグチャグチャになり取り込まれる寸前、胎の中から引つ張り出された彼の抜け殻をカナデは爆葬した。

そうして、バラバラに吹き飛んだ彼だが、実の所、まだ生きていた。

彼がウロヴオロスに喰われたその時、彼の意識が宿ったコアは既に場所を移していた。

そう、ウロヴオロスの中にだ。

何の因果か、彼の意識が宿っているのは特殊なコアだ。

他のコアとは違い、たとえ喰われようとも、次々と体を取り換え、操縦者を喰らい、体を奪い歩く性質を持っている。

そしてその度に、強く賢く大きく強大になっていく性質を備えている。

つまり、カナデが爆葬した体は彼の抜け殻であり、其処には彼は居なかった。

カナデはウロヴオロスを殺した際に、ウロヴオロスのコアを捕食している。

コアとは、戦場での司令官や人間の脳のような役割を果たす最も複雑で特殊なモノだ。

これを捕食する事で、オラクル細胞は統制される事が無くなり、オラクル細胞の集合体であるアラガミは霧散する事が確認されている。

そして、コアを失い霧散したオラクル細胞は再度寄せ集まり、コアを形成し、アラガミとして再生する。

これら一連のプロセスが、アラガミを地球上から、絶滅させるのは不可能と言われる由縁だった。

彼 シュウの体を奪った中の人 は自分がウロヴオロスに捕食されるのを防ぐ為に、ウロヴオロスの体の所有権を巡り争っていたウロヴオロスのコアを身代わりにカナデの神器に捕食させた。

一匹のアラガミにコアは一つだけ。

そういう前提、もしくは固定観念の下に戦っているカナデは、コアを捕食した事で倒したと確信し、以降ウロヴオロスの無力化に成功したものと扱った。

霧散するのを確認して、その生死を判断すれば良かったのかも知れなかったが、それはしなかった。

霧散するのも個体差が有る為、何時まで掛かるか分からない事。

アラガミによっては一日経って、ようやく霧散するような剛のものもいる事。

なにより、その時点でカナデの体力、気力ともに限界だった。

そうして、辛くもウロヴオロスの体へと乗り移った彼は生き延びたのだった。

(喰うなああああ!!!)

あれ？

またか！？

通算四度目の目覚めは最悪だった。

空には黒雲が満ち、風は強く吹き付け、俺は水溜まりに漬かっている。

だが、それよりもショックなのは、バラバラ死体になっていた事だ。

最悪だと思っ。

閑話休題。

まあ、何にせよ、起きたからには現状の確認が必要だろう。

俺の覚えている最期の光景は、身の丈ほどの武器を振るい化け物を狩る少女を庇って、触手に胸を貫かれ、そのまま口まで運ばれ、口腔一杯に生え揃った牙に生きたままに削り喰われた事。

そして今の姿は、正にミニウロヴオロス。

俺を喰った時の姿に比べると随分と小さい。

大きさは全長一メートルといった所。

触手を伸ばしても2メートルに届くかどうか。

そして色々と、俺の戦ったウロヴオロスとは違う所がある。

例えば、触手の一本、前足を構成する一本が蠍の化け物の鎧のように成っていて、蛇腹状に変わっていること。

例えば、背中にあの鳥っぽい羽が付いていること。その先に何だか爪っぽいのが付いていて、雷の球が打ち出せるみたいだ。

例えば、体から電気が漏れていて、蒼白く光っていること。これも放出できるようになっていた。

例えば、触手の先端が鋭い牙の生え揃った口に変わること。これは最初の体だった小型の化け物の口に酷似していた。

他にも色々有るが一貫して共通しているのは、以前の体で俺が喰

った、奪った化け物の一部分がこの体でも再現されているということ。

これはどういう事なのだろうか？

もし、もしも、例えば、IFの話だ。

喰った生き物の姿を盗れるなら、人間を喰えば、人間になれるの  
だろうか？

…やめよう。

この考えは危険だ。

その一線だけは越えないようにしよう。

多分、そこが俺が人間でいらられるかどうかの境線だと思うから。  
人を喰うようになったら、心まで化け物になったって事だろう。

そう思う。

そんなこんなで数日。

この体は睡眠を必要としないようで、一日が人間で在った頃より  
ずっと長い。

そんな中、俺は慎ましく日々を生きていた。化け物を狩る人間か  
らは、その姿を見掛ければ尻尾を撒いて逃げ出し、カメラマンから  
は写されぬように姿を隠し、執拗に化け物を捜す観察班とやらから  
逃げ回り、時に人間を観察し、時に触手の体を生かして盗み聞きし  
て、この世界の事、自分の事、彼らの事。

今まで知らなかった様々な事を知った。端的に言えば、『世界は侵  
略されている』的な状況で、俺はその侵略者。

キングクリムゾン！

もう面倒だから飛ばす！

「んで、博士達に見つかって、今に至ると」

「え？ もう終わりなのかい？ もっと有るだろう？ なんで人型  
になったかとか、あっちの白い娘との出会いとか」



博士が、床に寝転がり研究室に有った置物で遊んでいる人間型アラガミの少女を指差した。

「そこら辺は省略しても問題ないだろう、と思う」

「いやいや、問題有りまくりだよ。そこは重要な場面じゃないか」

博士に諭され、虚は口を開いた。

「なら、話すか。この体はだな。ウロヴオロスの体を手に入れてからもアラガミを喰っていたんだが、体が大きくなり過ぎてだな、不便だったから、自分で編んだんだ」

「編んだ？」

「そう。触手の一本一本を凝縮して細くしなやかな糸のような触手に変えて、それを人の筋繊維のようにしてヒトっぽくしたんだ。だから俺はヒト型アラガミ。ヒトの形をした、ヒトを真似たアラガミなんだよ」

「ふむ。となると君の体はあくまで触手の塊なのだね」

「そうだな。ヒトの形に編まれたているだけで、ほどけば触手の塊に元通りだ。編み方を変えれば、形は自由自在だな」

右腕を榊の前に差し出す。

何度かグツグツと確かめるように握り締める、と右腕の表面を構成するオラクル細胞が溶けるようにして消えていき、その下の触手の黒い筋繊維が剥き出しになる。

博士が驚いたのを見て、機嫌を良くした虚は座っていたソファーから立ち上がり、体の右半分の体表を溶かす。

真っ黒な人体模型の完成だ。

内臓は無いけどな。

そして、体右半分の触手の筋繊維をほどく。  
体の半分はヒトを模した形。

もう半分はウネウネと蠢く糸のように細い黒の触手。  
奇怪なオブジェクトの出現だった。

「これはまた。随分と気持ち悪いな」

博士が見たままの素直な感想を口にする。

しかし、仕方のない事であろう。

其れほどまでに今の虚の姿は奇怪で奇妙で気味が悪かった。

なまじ半分だけヒトの形をしているのが、恐怖に拍車を掛けていた。

「……………だよな。俺もこれは無いと思う」

研究室の壁に据え付けられた鏡。

其処に映った自分の姿を見て、虚は吐きそうになった。

「とまあ、こんな感じで、体は触手で出来ているってな」

自嘲混じりに虚が言った。

「全部が触手という訳ではないのだろうか？」

「そりゃそうだ。大体7割くらいが触手で、後の3割はコアとか面とか牙とか爪とかの細々としたモノって所だな」

「ふむ」

「…と、まあこんな事が有った訳だ」

一時間ほど掛け、語り終えた俺は喋りつかれた咽喉を潤すためにコーヒーを口に運ぶ。

「…実に興味深い話だったよ」

そう言うと、博士は何か思う所があったのか黙して考え出した。考える人のポーズだ。

「あー、もしかしたらあれかな？ いや、違う？ んー、如何にも判断が付けづらいな」

どうやら自分だけの世界に入ってしまったようだった。

「何か解ったのか？」

声を掛ける。

自身の事を知れるのなら、知っておきたい、そんな思いで。

「まだ推測だけだね。これは確証を得てから話すでしょう。ついては、その為にも君の細胞が少し欲しいんだが、貰っても良いかい？」

博士はそう問いかける。

口調は疑問系だが、その目はららんと光り輝いていて、断つても意味は無いだらうと、思った。

虚は仕方ないと思いつつも渡してやる事にした。

右手の触手を解く。

無数の触手によって編まれた腕が解け、触手の束となった。

触手を無造作に数本引き千切る。

”ぶちっ”と糸を無理矢理に引き千切ったかのような音がした。

「痛っ…。これだけ有れば充分だろう」

その言葉と同時に千切った触手を差し出す。

触手は力なく、くたつと垂れていた。

「助かるよ。実に興味深い研究資料だ。これで更にゴッドイーターは強くなれるかもしれない。そうだ、何かお礼をしなくてはならないね。何か欲しい物とかは有るかい？」

「それなら服をくれ。なるべく肌触りの良い服が欲しいな」

「ふむ。それなら彼女の分も作るうか。数週間ほど待っていてくれ。最高の服を用意するでしょう」

「期待して待つてるよ」

そうして会話は終わり、部屋を出た。

<研究室にて>

「私の予想が正しければ、彼こそが私が真に求めていた存在なのだろう。…さて、彼は私たち人類に救いをもたらす神となるのか。それとも人類に滅びをもたらす死神となるのか。それを見るのが、<sup>ス</sup>観察者としての最期の仕事となるのだろうね」

第十話（前書き）

五月六日初投稿

## 第十話

「これからお嬢ちゃんのパートナーになる。虚ヴォルスだ。よろしく頼む」

ヒバリちゃん…私、何か悪いことしたのかな？

side：虚ヴォルス

「は、博士…」

そう言つて、特徴的な桃色の髪をした少女は涙目で俺を指差した。伸ばした指はプルプルと震えていて、瞳には涙が溜まり決壊寸前のダムを思わせた。

「こ、これは何ですか？」

少女は涙目で、俺を直視しないように顔を背けて、俺を指差す。俺の見た目は泣くほど怖いのだろうか？  
自分的には格好良いと思うのだが…。

ちなみに今の格好は全身黒尽くめ、ゴーグルで顔を隠して、鮫のような口だけが見えている状態だ。

頭部には二本の角が付いていて、鬼のような見た目をしている。そんな筋骨隆々の大男。

うん、どっからどうみても不審者です。かっこいいと思っただけだな。

「彼が、これから君の所属する事になる、研究班直属部隊の隊長に

なるヴォルス君だ。仲良くするんだよ」

やれやれ困った子だ、とでも思っているかのような顔で、榊博士が口にする。

カノン嬢ちゃんが聞いているのは、そういうことじゃないだろうに。きつとそうと知りながら、とぼけているのだろうな。

嬢ちゃんも博士に答える気はないと、それで分かったのだろう。博士に聞くのは諦めて、俺に直接聞くみたいだ。

「そ、そうじゃなくて、…えっと」

カノン嬢ちゃんが榊博士に向けていた顔を俺に向け、意を決したように俺に向き合った。

「…に、人間ですか？」

直球ど真ん中ストレート。声を振り絞り、言葉にした。

手はぎゅっとスカートを握り締めていて、赤くなっていた。

俺は嬢ちゃんを安心させるためにも誠意を持って、質問に答えようと思う。

「ああ。正真正銘の人間だった事もある」

「……………!?!」

「今は人間ではないが、まあ気にしないでくれ」

「!」

「安心してくれ。俺は嬢ちゃんの味方だ。あんたに危害を加える様な真似は、絶対にしない」

「!!!!!!」

これだけ誠意を込めて言ったのだ。

きつと気持ちは伝わった。

俺はそう思う。

S i d e : カノン

「博士！ 何ですかアレは！？ 一体何なんですか！？ 答えて下さい！」

「どうぞ。取り敢えず落ち着きたまえ。そう噛みつかれては説明することもできないよ」

うつせえ！

「むう。ならさっさと説明してください！」

私は納得していませんからね！

「彼は新たな計画で造り上げられた、所謂改造人間といった存在だね。その性能を調べる為の部隊が必要になったんだよ」

新たな計画ですか。

聞いた事がないですね。

極秘のものなのでしょうが。

．．．怪しいですね．．．

「だからって、何で私なんですか！？」

私は第三部隊の隊員で隊には私を含めてたったの三人しか居ないんですよ！？」

そう。例え、新たな計画が発足して人員が必要になったからと言って、私とその部隊に引き抜かれる理由がないのだ。

唯でさえ、たった三人しか居ない部隊から引き抜く必要はない筈なのだ。

だから、きつと私がイライナイ娘だったり、人身御供にされた訳では



ない。ないっいたらないのだ。

「いや、でもね。さっき異動を告げたら、二つ返事で引き受けたじゃないか」

「気が変わりました！」

女心は秋の空。私の心は移り変わりが激しいんです。てゆうか、私、こんなに恐い人？と組みたくは有りません！

「仕方ない。これだけは使いたくはなかったのだけど……」

博士が机の引き出しから数百枚に及ぶ紙の束を持ち出しました。それはそれは分厚い紙の束です。

一体幾らするのでしょうか？

「何ですか、それは？ そんな紙ごときで私の気を変えられると思っっているんですか？」

今の時代、紙は高級品です。アラガミにより、世界中の資源の大部分を喰われた私たちに紙は高級品なのです。

あれを貰えたら、気が変わるかもしれませぬね。

……欲しいです。

「これが君に対する最終兵器だよ」  
リーサルウェポン

博士が紙の束から一枚手に取り、私に渡します。そこに書かれていたのは、

『もう無理です。』 『異動させてください。』 『砲撃怖い。』 『誤』

射怖い。』 『もうやだ。』 『お家に帰る。』

幾百にも及ぶ嘆願でした。

「何ですか、これは？」

「シユン君とカレル君から届いた嘆願書だよ」

第三部隊のメンバーは、私台場カノン。小川シユン。カレル・シユナイダーの三人です。

【味方撃ちのカノン】

【悪童シユン】

【守銭奴カレル】

通称、お荷物部隊、などと呼ばれています。甚だ不本意では有りませんが。

しかし、私たちはどの部隊にも勝るたった一つだけの力を持っていました。

そう。それは【絆】です。私たち三人の絆は、毎回死にかける厳しい任務の中で、磨いていった確かな力なのです。

例えば、私が二人の背後から撃てば、二人は背後を見ずに避ける事が出来ます。正に以心伝心。（アラガミとの命のやり取りの最中に、背後からの大火力なブラストは致命的な隙をもたらし、死にます。

二人は死にたくないが為に死に物狂いで避けます。今では、回避だけなら神業クラスです。ゲームでないので、当たれば死にます。木っ端微塵に吹き飛びます）

そんな二人が、私の除隊を嘆願する訳が有りません。さては博士……偽造ですね。

「博士……これは偽造文書ですね。ダメですよ。こんな事しちゃ」「いや、本当なただけどね」

嘘だ！

任務が完了する度に、パーティーをするくらい仲が良い私たちにそんな事有るわけない！

(二人は、生きて帰れた事を喜んでいます。カノンが誘われるのは、せめてもの仕返しに、酒を奢らせる為です。戦えば三人の中ではカノンが一番強いので、喧嘩は挑めません、挑みません)

「これは本物だよ」

「嘘ですね。信じたく有りません」

しつこい博士ですね。私はそんなものに騙されるようなアホではないんですよ。

「俺と組むの、そんなに嫌か？」

「はいっ！ 嫌ですっ！」

・・・はっ！？ しまった！ つい本音が・・・」

壁の花となっていた虚さんが急に声を掛けてくるから、つい本音が漏れてしまいました。

虚さんは床に手を付き、落ち込んでいます。orsな体勢ですね。

ちよつと悪いことをした気分ですね。ドキドキします！

・・・虚さんのあんな姿を見ると、組むのも案外悪くないかもしれないと思えてきました。

それに、誤射して教官に叱られる事もなくなるかもしれません。耐久力の実験ですって言えば、怒られないかもしれません。

キャッホー。

これで、ご飯を抜かれる事もなくなったりして。やった。嬉しい。

キャッホー。

「取り敢えず、この書類は本物だし、君の異動は既に決定事項で決まった事だ。どうしても嫌だと言うのなら、ゴッドイーターを辞めてもらつ事になるが、どうするんだい？」

真剣な表情で、言葉を発する榊博士。

しかしもう私の心は決まっています。

「仕方ないですね。そうまで言われて断わったら、女が廃るっつてもんです。

良いでしょう。この私、超絶ビューティフォーカノンちゃんが、その役目引き受けましょう！」

仕方なく、あくまで仕方なく、ですよ！

決してこの人？なら誤射しても大丈夫そう、とか思ったからじゃありませんからね！

「うんうん。それじゃ後は頼んだよ」

そう言って、爽やかな笑みと共に博士は部屋を出ていきました。それはまるで、肩の重みが取れたかのような笑みでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8209p/>

---

この体の七割は触手で出来ている

2011年5月6日16時22分発行